

Subject : **Japanese**

Production of Courseware  
e- Content for Post Graduate Courses



Paper No. 02 : **日本語学 (Japanese Linguistics)**

Module 10 : **授受表現 (Benefactive Expressions)**



ज्ञान-विज्ञान विमुक्तये



### Development Team

**Principal Investigator:** **Prof. Anita Khanna**  
Jawaharlal Nehru University, New Delhi

**Paper Coordinator:** **Prof. Prashant Pardeshi**  
The National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL)

**Content Writer:** **Prof. Emerita Yuriko Sunakawa**  
University of Tsukuba


**Content Reviewer:** **Prof. Prashant Pardeshi**  
The National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL)

Japanese

Japanese Linguistics

授受表現 (Benefactive Expressions)

Description of Module	
Subject Name	Japanese
Paper Name	日本語学 (Japanese Linguistics)
Module Title	授受表現 (Benefactive Expressions)
Module ID	JPN-P02-M10
Quadrant 1	E-Text

 **Pathshala**  
पाठशाला  
A Gateway to All Post Graduate Courses

Japanese

Japanese Linguistics

授受表現 (Benefactive Expressions)

じゅじゅひょうげん  
授受表現

もくてき もくてき おんけい ともな こうい じゅじゅ あらわ ひょうげん  
目的：このモジュールの目的は、ものや恩恵を伴う行為の授受を表す表現について、  
こうぶん い み じゅじゅどうし してんせいやく じゅじゅひょうげん つか かた せつめい  
その構文と意味、授受動詞の視点制約、授受表現の使い方を説明することである。

じゅじゅどうし  
1. 授受動詞

ぐたいてき おんけい こうい あらわ どうし じゅじゅどうし じゅじゅどうし  
具体的なものや恩恵の行為のやりとりを表す動詞を授受動詞という。授受動詞は、  
ぐたいてき あらわ ほんどうし ようほう こうい おんけい あた  
具体的なもののやりとりを表す本動詞の用法のほか、ある行為が恩恵を与えるもので  
あらわ ほじょどうし ようほう も い か ようほう かんれんげんしょう  
あることを表す補助動詞の用法も持っている。以下それぞれの用法とその関連現象に  
せつめい  
ついて説明する。

じゅじゅ こうぶん ほんどうし ようほう  
2. 授受の構文：本動詞の用法

ぐたいてき じゅじゅこうい あた ひと う と ひと かんよ  
具体的なものの授受行為には「与える人」と「受け取る人」と「もの」が関与する。  
にほんご じゅじゅ あらわ ほんどうし こうぶん つぎ しゅ  
日本語の授受を表す本動詞の構文には次の3種がある。

- A) [与<sup>あた</sup>える人<sup>ひと</sup>] ガ [受<sup>う</sup>け取<sup>と</sup>る人<sup>ひと</sup>] ニ [もの] ヲ 【やる】  
(あげる／さしあげる)
- B) [与<sup>あた</sup>える人<sup>ひと</sup>] ガ [受<sup>う</sup>け取<sup>と</sup>る人<sup>ひと</sup>] ニ [もの] ヲ 【くれる】  
(くださる)
- C) [受<sup>う</sup>け取<sup>と</sup>る人<sup>ひと</sup>] ガ [与<sup>あた</sup>える人<sup>ひと</sup>] ニ/カラ [もの] ヲ 【もらう】  
(いただく)

### 3. 授受動詞の敬語

上の【 】に示した授受動詞は、A)とC)では、二格の人がガ格の人と対等か目下の場合に使われる。二格の人がガ格の人より目上か親しくない人の場合は( )の中の場合に【 】に示した動詞を使う。一方、B)では、ガ格の人が二格の人と対等か目下の場合に【 】に示した動詞を使う。ガ格の人が二格の人より目上か親しくない人の場合は( )の中の場合に【 】に示した動詞を使う。

ただし、A)の「あげる」は敬意の度合いが落ちて、二格が目下の人や人間以外を表す場合にも使われるようになり(例:花に水をあげた)、親しくない人や目上の人を表す場合には使いにくくなっている。また、「やる」を乱暴な言い方だと感じる人が多くなっている。そのため、A)の構文では、二格が目下の人や人間以外で

かた たいとう めした めうえ した  
 い方をするとき「やる」、対等または目下のときに「あげる」、目上または親しくな  
 ひと つか へんか  
 い人のときに「さしあげる」を使うというように変化しつつある。

い か しめ かたち だいひょうけい もち たと  
 以下では，【 】に示した形を代表形として用いる。例えば，「やる」は「や  
 どうし だいひょう しょう  
 る・あげる・さしあげる」という3つの動詞の代表として使用する。

#### 4. 授受動詞の視点制約：本動詞の用法

にほんご えいご そうとう い かた せつ こうぶん  
 日本語には，英語の 'give' に相当する言い方に，2節で示した A) と B) の2つの構文  
 つか ちが はな て してん あた ひと う と ひと  
 が使われる。これらの違いは，話し手の視点が [与える人] にあるのか， [受け取る人]  
 てん こうぶん はな て してん あた ひと ぼあい  
 にあるのかという点にある。A) の構文は話し手の視点が [与える人] にある場合，B)  
 こうぶん はな て してん う と ひと ぼあい もち  
 の構文は話し手の視点が [受け取る人] にある場合に用いられる。

つぎ こうぶん あた ひと わたし ぶん もんだい  
 そのため，次の A) の構文は， [与える人] が「私」である (1)a の文は問題ないが，  
 ぶん ただ はな て してん じぶんじしん わたし いちばん お  
 (1)b の文は正しくない。話し手の視点は自分自身である「私」に一番置きやすいのに，  
 ぶん あた ひと わたし わたし くら してん お こ  
 (1)b の文では [与える人] が「私」ではなく，「私」に比べて視点が置きにくい「子  
 ども」になっているからである。

(1) a. 私<sup>わたし</sup>は子ども<sup>こ</sup>にお菓子<sup>かし</sup>をあげた。

b. \*子ども<sup>こ</sup>は私<sup>わたし</sup>にお菓子<sup>かし</sup>をあげた。

(「\*」は、この文が許容できないことを示す。)

いっぽう つぎ こうぶん う と ひと わたし ぶん もんだい  
 一方、次の B) の構文は、[受け取る人] が「私」である (2)a の文は問題ないが、(2)b  
 ぶん ただ ぶん う と ひと わたし わたし くら  
 の文は正しくない。(2)b の文は、[受け取る人] が「私」ではなく、「私」に比べて  
 してん お こ  
 視点が置きにくい「子ども」になっているからである。

(2) a. 子ども<sup>こ</sup>は私<sup>わたし</sup>にお菓子<sup>かし</sup>をくれた。

b. \*私<sup>わたし</sup>は子ども<sup>こ</sup>にお菓子<sup>かし</sup>をくれた。

つぎ ぶん かく こ もんだい ぶん  
 ただし、次の文は二格が「子ども」になっても問題のない文である。

きんじょ ひと わたし こ かし  
 (3) 近所<sup>きんじょ</sup>の人が (私<sup>わたし</sup> の) 子ども<sup>こ</sup>にお菓子<sup>かし</sup>をくれた。

ばあい こ はな て みちか そんざい きんじょ ひと  
 この場合は、「子ども」が話し手にとって身近な存在であるために、「近所の人」より  
 こ はな て してん お  
 も「子ども」のほうに話し手の視点が置かれるためである。

く の げんしょう じゅじゅどうし してんせいやく ほうそく せつめい  
久野 (1978) はこのような現象を授受動詞の視点制約という法則によって説明して  
いる。

じゅじゅどうし してんせいやく  
授受動詞の視点制約

「クレル」は、話し手の視点が、主語（与える人）よりも与格目的語（受け  
と ひと よ とき もち はな て してん しゅごよ  
取る人）寄りの時にのみ用いられる。「ヤル」は、話し手の視点が主語寄り  
ちゅうりつ とき もち  
か、中立の時にのみ用いられる。(p.141)

ばあい してんせいやく はな て してん う と ひと お  
「もらう」の場合も、視点制約はあり、話し手の視点が [受け取る人] に置かれる  
もち つぎ ぶん もんだい ぶん う と ひと  
ときに用いられる。そのため、次の (4)a の文は問題ないが、(4)b の文は [受け取る人]  
わたし してん お こ ふしぜん  
が「私」より視点が置きにくい「子ども」となっているため不自然である。

わたし こ か し  
(4) a. 私は子どもにお菓子をもらった。

こ わたし か し  
b. \*子どもは私にお菓子をもらった。

う と ひと こ つぎ じゅうぞくせつ つか  
しかし、[受け取る人] が「子ども」であっても次の (5)a のように従属節に使ったり、  
れんたいしゅうしよくせつ つか もんだい ぶん  
(5)b のように連体修飾節に使ったりすれば、問題ない文となる。



(5) a. <sup>こ</sup>子どもは<sup>わたし</sup>私に<sup>かし</sup>お菓子<sup>よろこ</sup>をもらって喜んだ。

b. <sup>こ</sup>子どもは<sup>わたし</sup>私にも<sup>かし</sup>もらった<sup>よろこ</sup>お菓子<sup>た</sup>を喜んで食べた。

<sup>くら</sup>それに比べて「やる」や「くれる」の場合の視点制約は厳格で、<sup>ばあい</sup>従属節<sup>してんせいやく</sup>や<sup>げんかく</sup>連体<sup>じゅうぞくせつ</sup>節<sup>れんたい</sup>や<sup>しゅうしょくせつ</sup>修飾節<sup>つか</sup>に使った場合でも (6) で示すように許容できない文となる。

(6) a. \*<sup>こ</sup>子どもは ( <sup>わたし</sup>私に ) <sup>かし</sup>お菓子<sup>よろこ</sup>をあげて喜んだ。

b. \*<sup>こ</sup>子どもは<sup>わたし</sup>私が<sup>かし</sup>くれた<sup>よろこ</sup>お菓子<sup>た</sup>を喜んで食べた。

<sup>じゅじゅ</sup>なお、授受を表す動詞には、このほかに、<sup>あた</sup>「与える、授ける」や<sup>う</sup>「受け取る、受ける」<sup>と</sup>などもある。これらの動詞に視点制約はなく、<sup>どうし</sup>「私が子どもにお菓子を与えた」<sup>してんせいやく</sup>「子どもが私に希望を与えた」、<sup>わたし</sup>「私は子どもから新聞を受け取った」<sup>わたし</sup>「子どもは私から<sup>かし</sup>お菓子<sup>う</sup>を受け取った」のように言うことができる。

<sup>じゅじゅどうし</sup>授受動詞は視点制約のある「やる」「くれる」「もらう」などに限られ、<sup>かぎ</sup>「与える」<sup>あた</sup>や<sup>う</sup>「受け取る」は授受動詞とされないのが普通である。また、授受動詞には恩恵の意味<sup>じゅじゅどうし</sup>が<sup>ふつう</sup>含まれるが、<sup>じゅじゅどうし</sup>「与える、授ける」や<sup>おんけい</sup>「受け取る、受ける」には<sup>い</sup>含まれない。(7) の例



は「罰ばつをあた与える」ということが恩恵おんけいをあた与えることであると理解りかいしにくいおんけいため、恩恵の  
意味いみのない「与える」は使つかえるが、恩恵の意味いみを含む「あふくげる」を使つかうと不自然ふしぜんになる。

(7) a. 教師きょうしは生徒せいとに厳きびしい罰ばつをあた与えた。

b. \*教師きょうしは生徒せいとに厳きびしい罰ばつをあげた。

## 5. 授受じゅじゅの構文こうぶん：補助動詞ほじょどうしの用法ようほう

授受動詞じゅじゅどうしは、具体的なものぐたいてきのやりとりをあらわ表す本動詞ほんどうしの用法ようほうのほか、ある行為こういが恩恵おんけい  
をあた与えるものであることをあらわ表す補助動詞ほじょどうしの用法ようほうも持もっている。以下の (8)a が本動詞、  
(8)b が補助動詞ほじょどうしの例れいである。

(8) a. 母ははは 弟おとうと にセーターをあげた。

b. 母ははは 弟おとうと にセーターをあ編あんであげた。

補助動詞ほじょどうしの場合ばあいも本動詞ほんどうしの構文こうぶんとほぼ同じで、基本的には以下の 3 種おなである。  
基本動詞きほんてき、いいか、しゅしゅ

- A) <sup>あた</sup> <sup>ひと</sup> [与える人] <sup>が</sup> <sup>う</sup> <sup>と</sup> <sup>ひと</sup> [受け取る人] <sup>ニ</sup> <sup>こうい</sup> [行為をして] **【やる】**  
(あげる／さしあげる)
- B) <sup>あた</sup> <sup>ひと</sup> [与える人] <sup>が</sup> <sup>う</sup> <sup>と</sup> <sup>ひと</sup> [受け取る人] <sup>ニ</sup> <sup>こうい</sup> [行為をして] **【くれる】**  
(くださる)
- C) <sup>う</sup> <sup>と</sup> <sup>ひと</sup> [受け取る人] <sup>が</sup> <sup>あた</sup> <sup>ひと</sup> [与える人] <sup>ニ/カラ</sup> <sup>こうい</sup> [行為をして] **【もらう】**  
(いただく)

6. 授受動詞の視点制約：補助動詞の用法

<sup>ほ</sup> <sup>じょ</sup> <sup>どう</sup> <sup>し</sup> <sup>し</sup> <sup>て</sup> <sup>ん</sup> <sup>せい</sup> <sup>やく</sup> <sup>ほ</sup> <sup>じょ</sup> <sup>どう</sup> <sup>し</sup> <sup>よう</sup> <sup>ほう</sup>  
補助動詞にも本動詞と同じ視点制約があり、本動詞の場合と同様に、視点制約を破  
<sup>ぶ</sup> <sup>ん</sup> <sup>き</sup> <sup>ょ</sup> <sup>う</sup>  
った文は許容されない。

<sup>わ</sup> <sup>た</sup> <sup>し</sup> <sup>こ</sup> <sup>か</sup> <sup>し</sup> <sup>つ</sup> <sup>く</sup>  
(9) a. 私は子どもにお菓子を作った。

<sup>こ</sup> <sup>わ</sup> <sup>た</sup> <sup>し</sup> <sup>か</sup> <sup>し</sup> <sup>つ</sup> <sup>く</sup>  
b. \*子どもは私にお菓子を作った。

<sup>こ</sup> <sup>わ</sup> <sup>た</sup> <sup>し</sup> <sup>か</sup> <sup>し</sup> <sup>つ</sup> <sup>く</sup>  
(10) a. 子どもは私にお菓子を作ってくれた。

<sup>わ</sup> <sup>た</sup> <sup>し</sup> <sup>こ</sup> <sup>か</sup> <sup>し</sup> <sup>つ</sup> <sup>く</sup>  
b. \*私は子どもにお菓子を作ってくれた。

(11) a. 私<sup>わたし</sup>は子ども<sup>こ</sup>に／からお菓子<sup>かし</sup>を作<sup>つく</sup>ってもらった。

b. \*子どもは私<sup>わたし</sup>に／からお菓子<sup>かし</sup>を作<sup>つく</sup>ってもらった。

## 7. 助詞の使い方

本動詞の「あげる」と「くれる」の構文では [受け取る人] が助詞の「に」をとるが、補助動詞の「あげる」と「くれる」は、(12)と(13)のように「に」がとれる場合と(14)と(15)の a のように「に」がとれず、b のように「を」を使わなければならない場合がある。

(12) 私<sup>わたし</sup>は弟<sup>おとうと</sup>に自転車<sup>じてんしゃ</sup>を買<sup>か</sup>ってあげた。

(13) 祖母<sup>そぼ</sup>は私<sup>わたし</sup>に自転車<sup>じてんしゃ</sup>を買<sup>か</sup>ってくれた。

(14) a. \*私<sup>わたし</sup>は弟<sup>おとうと</sup>に助<sup>たす</sup>けてあげた。

b. 私<sup>わたし</sup>は弟<sup>おとうと</sup>を助<sup>たす</sup>けてあげた。

(15) a. \*友達<sup>ともだち</sup>は私<sup>わたし</sup>に助<sup>たす</sup>けてくれた。

b. 友達<sup>ともだち</sup>は私<sup>わたし</sup>を助<sup>たす</sup>けてくれた。

「<sup>たす</sup>助ける」「<sup>あんない</sup>案内する」「<sup>お</sup>起こす」「<sup>はげ</sup>励ます」「<sup>つ</sup>連れて行く」のように相手に直接  
の働きかけをする行為の場合は、「に」ではなく「を」を使う。

また、本動詞の「<sup>ほんどうし</sup>もらう」の構文では[<sup>こうぶん</sup>与える人]が助詞の「<sup>に</sup>」か「<sup>から</sup>」をと  
るが、補助動詞の「<sup>ほじょどうし</sup>もらう」は、次の(16)(17)のように「<sup>つぎ</sup>から」がとれる場合と(18)  
(19)のaのようにとれない場合がある。

(16) 私<sup>わたし</sup>は友達<sup>ともだち</sup>からそのニュース<sup>おし</sup>を教<sup>おし</sup>えてもら<sup>もら</sup>った。

(17) 私<sup>わたし</sup>は祖母<sup>そぼ</sup>から自<sup>じてんしゃ</sup>転車<sup>か</sup>を買<sup>か</sup>ってもら<sup>もら</sup>った。

(18) a.\*孫<sup>まご</sup>から肩<sup>かた</sup>をた<sup>た</sup>いてもら<sup>もら</sup>った。

b. 孫<sup>まご</sup>に肩<sup>かた</sup>をた<sup>た</sup>いてもら<sup>もら</sup>った。

(19) a.\*壊<sup>こわ</sup>れたラジ<sup>ともだち</sup>オを友<sup>なお</sup>達<sup>なお</sup>から直<sup>なお</sup>してもら<sup>もら</sup>った。

b. 壊<sup>こわ</sup>れたラジ<sup>ともだち</sup>オを友<sup>なお</sup>達<sup>なお</sup>に直<sup>なお</sup>してもら<sup>もら</sup>った。

(16) の場合<sup>ばあい</sup>は新<sup>じょうほう</sup>聞<sup>はな</sup>の情<sup>てがわ</sup>報<sup>いどう</sup>が話<sup>ばあい</sup>し手<sup>じてんしゃ</sup>側<sup>はな</sup>に移<sup>てがわ</sup>動<sup>いどう</sup>し、(17) の場合<sup>ばあい</sup>は自<sup>じてんしゃ</sup>転<sup>はな</sup>車<sup>てがわ</sup>が話<sup>いどう</sup>し手<sup>いどう</sup>側<sup>かか</sup>に

移<sup>いどう</sup>動<sup>はな</sup>する。このよう<sup>てがわ</sup>に、話<sup>いどう</sup>し手<sup>かか</sup>側<sup>こうい</sup>へ<sup>あらわ</sup>の物<sup>ばあい</sup>の移<sup>いどう</sup>動<sup>かか</sup>に関<sup>こうい</sup>わ<sup>あらわ</sup>る行<sup>ばあい</sup>為<sup>いどう</sup>を表<sup>あらわ</sup>す場合<sup>ばあい</sup>なら「<sup>いどう</sup>から」

つか いっぽう はな てがわ いどう  
を使うことができる。一方，(18)や(19)では話し手側にもものが移動するわけではない。

ばあい つか  
このような場合は「から」が使えない。

## 8. 授受表現の使い方：補助動詞の用法

ほじょどうし ようほう つぎ てん ちゅうい ひつよう  
補助動詞の用法は次の点に注意する必要がある。

### ● 授受の補助動詞を使わないといけないとき

はな て してん お ひと はな て じしん はな て みちか ひと こうい う と  
話し手が視点を置きやすい人（話し手自身か話し手の身近な人）が行為を受け取る

ひと こうい おんけいてき できごと ばあい じゅじゅ ほじょどうし つか  
人で，かつ，その行為が恩恵的な出来事である場合，授受の補助動詞を使わないと

ふしぜん  
不自然になる。

じしん うしな かぞく わたし はげ  
(20) ときどき自信を失いかけたが，そんなとき，家族みんなが私を {励ましてくれ  
た/\*励ました}。

うみ ちか ひと たす たす  
(21) 海でおぼれそうになったとき，近くにいる人が {助けてくれた/\*助けた}。

### ● 授受の補助動詞を使わないほうがいいとき

はな て してん お ひと なん こうい き て だいさんしゃ  
「てやる」は，話し手が視点を置きやすい人が，何らかの行為によって聞き手や第三者

おんけい あた あらわ おんけい さず おんき いんしょう  
に恩恵を与えることを表すため，「恩恵を受けている」という恩着せがましい印象を

あた おそ たいとう めした ひと つか もんだい した ひと  
 与える恐れがある。そのため、対等か目下の人に使うのは問題ないが、親しくない人や

めうえ ひと つか しつれい いんしょう あた  
 目上の人に使うと失礼な印象を与えることになる。

ゆうじん しゅくだいてつだ  
 (22) (友人に) 宿題手伝ってあげようか。

めうえ ひと えき おく さ あ  
 (23) (目上の人に) 駅まで送って差し上げましょうか。

ゆうじんあいて とく もんだい けいご つか  
 (22) は友人相手なので特に問題はない。しかし (23) は敬語を使っているにもかかわらず、

この い かた ばあい けんじょうご つか つぎ い  
 好ましい言い方ではない。このような場合は謙讓語を使って次のように言ったほうが  
 いい。

えき おく  
 (24) 駅までお送りしましょうか。

キーワード：

じゅじゅ おんけい じゅじゅどうし してん してんせいやく ほじょどうし ほんどうし  
 授受 恩恵 授受動詞 視点 視点制約 補助動詞 本動詞

\*\*\*\*\*